

---

# 精霊とぼく

蒼宮 螢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

精霊とぼく

### 【Zマーク】

Z8003H

### 【作者名】

蒼宮 螢

### 【あらすじ】

ぼくは神立一太。今日、初めて行った中学校で尋くんっていう男の子と友達になつたんだ。尋くんは靈とか超能力とかに興味があるらしくて・・・。

(前書き)

何を伝えたいのか、わけがわからん、と思う方もいらっしゃるかも  
しれませんが。  
どうぞ。

世には、超能力と精霊の力、自らの魂を駆使し、それぞれの目的のために闘う者たちがいた。

彼等は戦人と呼ばれた。「ウォーリア」

## 精霊の詩

### short story

風「コーステージ」が吹き、木々の葉は躍るように揺れていた。そこは、ぼくの新舞台「コーステージ」へと続く道の景色。まだ未知に包まれた新舞台に、ぼくは心を躍らせる。まるで隣の木のように。

季節は春。今日は入学式。見知らぬ学校に行くことに、最初はおどおどしていたけれど、今は希望でいっぱいだ。一体どんな人たちに会えるんだろう？ 友達はたくさんできるかな？

「きつといいお友だちができるわ」

「うん」

お母さんの言葉に、ぼくはわくわくしながら答えた。

### サイホクガクエイン 塞北学園中等部

ぼくはクラス表を見てBクラスだということを知り、Bクラスの席についていた。この学校、このクラス、この席で、新しい生活が始まるんだ…！ ワクワク感が止まらない。

一度、ぼくはクラスを見渡してみた。うん、そんな悪そうなやつはないなさそうだし、結構仲良くなれそうだ。

ガラガラッ

ドアが開いた。生徒は全員席についている。どう「」とは先生だ！

「えー、私がこのクラスを担当することになった倉石だ。<sup>クライン</sup>一年間よろしくな」

「えー、この人が先生か。なんかちょっと怖そつだな。<sup>アイバ</sup>早速が出でるぞ。相葉」

「はーい」

「秋倉」

「あい」

「石谷」

「はい」

「宇川」

「ういーす」

「おお

……、どんどんぼくに近づいてくるだ。

「火神」

「はい」

「神立」

「はい！」

「ぼくだ！！」

「はい！」

「あ、しまった！つい大声で……」

「おお、元気がいいな。<sup>スザワ</sup>須澤」

「はいー」

……よかつたー。特にみんな、なんも思つてないみたいだ。

「……以上だ。この32人で、この一年間頑張つていこう。……この次だが、入学式があと20分ほどで始まる。10分前には廊下に出席番号順で並ぶこと。それまでは好きにやつていいぞ」

「10分かー。誰か話せそうな人はいないかな。……あ、前の席の人、ひとりだ。

「ねえ、名前なんていうの」

ぼくは後ろから声を掛けた。でも返事はない。窓をずっと

眺めている。

「ねえ！」

「んあつ？俺か？」

はあ……、やつと振り向いてくれた。

「うん、キミ」

「火神だよ、出席で呼ばれてたる」

……ああ、確かに。呼ばれてたかも。つていうか呼ばれてないわけないよね。

「おまえは……、神立、だつたか？」

「あ、うん。よく覚えてたね」

「ん、ああ、まあ、なんとなくなすごいなあ……、ぼく誰も覚えてないよ。

「小学校はどこ行つてたの？」

「照領小、ショウリョウショウこの近く」

「あ！結構ぼくの家に近いね。ぼくハハシマサ川小学校行つてたんだ」

「へえ、そなのか」

「うん」

……。話題が戻きた。どうしよう、この氣まずい空気。なんか言わなくっちゃ。

「何か、話題ないかな」

「話題？そうだな……超能力つて、信じるか？」

「超能力？スプーン曲げとか、テレパシーみたいなやつ？」

「ん、まあ、他にもいろいろ」

超能力があ。火神くんはそういうのに興味があるのかな。うーん……。

「……信じない、かな」

「そうか、だよな」

「火神くんは信じてるの？」

「んんー、まあ、な」

そつかー、なんかおもしろそう。

「どうじうのがあるの？」

「そりやあいろいろだけどな、例えば靈視とか、瞬移、伝心とかだな」

「フィール？」

「ん、ああ靈を見るひー」と

「へえー」

「靈を見る」とも超能力なんだ。知らなかつた。超能力も結構おもしろいかも。

「じゃあ、靈とかも信じるんだね」

「ん、ああ、まあな」

「へー、火神くんはこうじうオカルト系なのが好きなんだ。おもしろいな。

「あ、そうだ。下の名前はなんてこうの？」

「ん、ああ、尋だ」

「尋くんか。僕は一太。<sup>ジン</sup><sup>イッタ</sup>よろしくね尋くん」

「ああ、よろしくな」

「おーい、廊下並べつつたろ。並べー」

先生がドアからひょっこりと顔を出して言つた。

「行かなくちや。じゃあ、後でかな？ あ、そつそつ。今日一緒に帰らない？」

「ああ、別にいいけど」

「わかつた！ じゃあ後でね！」

ぼくは尋くんにそう言つと教室を飛び出した。

……とは言つたものの、尋くんはぼくのすぐ前なんだよね。後でじゃないし…。ま、いつか。

この北塞学園には体育館が3つある。一番大きくて古い体育館は第一体育館。柔道場や更衣室などがある、一番小さな体育館は第二体育館。そして、第一よりは少し小さいけれど、第二よりはかな

り大きい一番新しい体育館は第三者体育館。今、ぼくたちがいるのは第一体育館。もちろん入学式が行われているからだ。

「皆さんは、自立の道を歩み始めたのです。もしもその途中でわからぬことがありますたら、頼れる先輩たちに聞いてみてください。きっと力になってくれるはずです」

自立の道かー。そうだよなー、あと五年後には大学進路も考えなくちゃいけないんだもんな。そんなときだった。

「熱つ」

急に首筋のところらへんが、火傷をしたみたいに熱くなつた。すぐにそこを触つてみる。特に何もない。ヒリヒリもしない。でも、ほんの一瞬だつたけれど、確かに感じた。…なんだつたんだ？

入学式まで変わつたことといえば、これくらいだった。

「世の万物には魂が宿る。それは理であり、すべてだつた」「理つて？」

「ん、あー、当たり前の理由みたいなもんだな」

「ここは上山公園。今は午後一時。もちろん学校は結構前に終わつた。家が近かつたから、帰宅後もこつして遊んでるのだ。」

「…」

「あれ、その続きは？」

「…忘れた。つていうか読んでない」

「ああ、そういうことか。…まあ、尋くんつてこんな感じの人だ。

「おまえは、なんか話題ないのか？」

「いきなり？」

「ぼく?んー、そうだなあ…。ヒーローものとかって、尋くん見る?」

「見ない」

即答…！

「御面ライターズとか知らない?」

「知らない」

「なつ……。それじゃあ話題を続けるにも続けられないじゃないか。」

「…」

「…」

「どうしよう。ぼくの得意分野とこつたらヒーローものへりこしか！」

そのとき、光る何かが尋くんの背後にさりげにいた。

「えつ？」

「何かが、浮いてる？赤く、光ってる……。」

「おおおつ！？」

ぼくは腰を抜かしてしまった。ぺたんと尻を地面につけてしま

う。

「ん？どうした？」

「ひつ、ひつ、ヒトダマだあーつ！…」「

赤いヒトダマがつ！尋くんの後ろに！…

「どうあるんだよそんなの」

尋くんは少し笑いながら辺りを見回す。

「後ろだよ！…つ、あれ？」

「牛？」

「いや、違うけど…」

「あれれ？何もない。確かに、確かにあったのに…！」

「人違ひなんじやないかあ？」

「どんな人と間違えるつていうんだあッ…！」

「…い、いきなり強気になつたな…」

「なんだつたんだあれば？ホタル？いや、絶対にヒトダマだ！」

「靈とかそういうの信じてるんだつたらヒトダマくらいい信じじよ

「いや、靈つてこののはフツーの人には見え…」

「…どうしたの？」

「…いや、ちょっとな」

「どうしたんだ？尋くん。

「まあ、とにかくフツーの人には…、フツーの人?」

「何自問自答してんの?」

「……。やっぱなんでもない。気にすんな」と言わると、逆に気になる…。

「あ、じゃあ靈が見える人はと」

「俺ちょっとトイレ行つてくる、きよつと待つてろ」

尋くんはぼくの言葉を遮ると、急いでトイレに走つていった。

……怪しい。

トイレに行きたそうな様子は特になかったのにトイレに駆け込むなんて…。何かを隠してるに違ひない!

……となれば、やっぱリスパイしかないのでしょ!尋くんはぼくで隠れて何をしてるのか、確かめてやる…! そおーっと、そおーっと。

「おい」

誰?今、ぼくは忙しいんだから。

「…おい」

もう…だから誰…!

「はい、なんで…えつ」

振り向こうとしたとき、ぼくは空を飛んでいた。いや、飛んではないな。浮いていた?いや、違う。何かに吹っ飛ばされた…、そう!何かにぶつ飛ばされたんだ!…多分蹴られて。

「…ぶはあつ…!」

地面に大激突!なになになに!?何が起こつてんのぞ…?  
すぐに振り返つてみる。

…え?誰も、いない…。でもおかしい。確かに蹴つ飛ばされてぼくは宙を舞つた。でも、誰もいない…?

「ん?」

何か、もやもやしたものが近づいてくる。なんだあれ?黒っぽくて、煙みたいだ。いや、煙じゃない。何か形作ってる。

…人?人の、形?もしかして…、ぼくあいつに蹴られたの!?

ち、近づいてくることは、また蹴られるつてこと…?

「ひ、ひやああああ～つ…!」

ぼくは恐怖のあまり叫び声をあげる。まるでムンクの叫びだ。

「んな変な声出してんのはビニのビニつだ?」

…え? 赤い、炎…? ま、まさか! ひ、ヒトダマが…、ぼくの田の前に…!

「んー、多分ベンチの前で倒れてる神立一太くんだな」

尋くん? 今的声音は尋くんだ。じゃあ前に言つたのは…?

「ひつ、ヒトダ」

「マジやあないんだな、それが」

「尋くん!」

「よく見てみるよ」

「よく…?」

どう見ても炎にしか…。ん? 炎だけビ…、中に何かが、ある?

「えつ…! ?」

炎の中に、人がいる…?

「見えたか?」

「うん、多分…」

「人、に見えたか?」

「うん…」

でもあんな小さな炎の中に入人がいるなんて…。

「あれは人じやあない」

「え? …あつ…! ?」

「そう、靈。それも自然の力、炎を宿した精靈。俺たちはそれを炎<sup>ヒ</sup>靈<sup>レイ</sup>つて呼んでる」

「炎靈…」

ホントに、靈つていたんだ…。

「それでもつて、あいつの名前はフイレだ。フイレー!」

「おう…」

炎 フイレは、ぼくの前から消えると、ぼくの隣にいた尋

くんの横に現れた。

「じゃああの黒いもやもやしたのも…？」  
「いや、あいつは精霊じゃない。あいつは悪霊ゴーストに取り憑かれた人間、

「デーモンだ」

「デーモン…、鬼？」

「ん、まあ、そう呼ばれてるだけだけどな。あいつらはフツーの人間には見えない。精霊も同じだ」

普通の人には見えない…。じゃあぼくは普通じゃないってこと！？

「ま、別に見えても悪いことはない。それよりか周りより得するんじゃないか？」

「あ、そんなこと言つてる場合じゃないや、尋くん…」

「ん？あ、まあ、そうだな」

尋くんは右手を前に突き出すと、その甲に黒い文字のよつなものが浮かび上がった。

「フィレ！」

「待つてましたっ！」

「いくぞ、アブゾーブ同化！」

フィレは黒い模様の中に吸い込まれ、すると尋くんの手は赤々と燃えだした！

「え！？大丈夫なの！？」

「気にすんなって」

炎は手から肩、首の方へ上つていき、右頬を伝つて額まで行く

と跡形もなく消えた。炎が通つた場所には炎のような赤い模様が刻まれている。

「これがアブゾーブ同化つてやつだ」

「アブゾーブ…」

「ソウルウェポン！」

再び尋くんの右手が燃え、尋くんは燃えている右手を左の方へ差し出した。そして右へすばやくスライドする。その跡は炎の棒の

ようになつた。

「すごい…」

たまたま話しかけた人が、尋くんが、こんなことをできる人だつたなんて…。

これは、運命としか思えなかつた。

尋くんは炎の棒の左端を掘む。すると炎は弾け飛び、炎を模した装飾品を先端につけた赤い剣になつた。尋くんはそれを『デーモンに向ける。そして言つた。

「チェックメイト、だな」

尋くんはデーモンに向かつて駆け出し、剣は炎に包まれる。

「ハアアアツー！」

炎の刃は『デーモンを斬り裂き、男に取り憑いていた悪霊は、男を離れて消滅した。<sup>ウォーリア</sup>』<sup>ゲースト</sup>

「これが、戦士の力つてやつだ」

尋くんは元の姿に戻ると、ぼくに笑いかける。ぼくも笑う。

これから、新しい日々が始まる。そんな不思議な予感がした1日でした。

The End

(後書き)

初めまして、ホタルです！上の名前はソウキュウと読みます、とかさつぱりわからないでしょう。。。この小説は、”運命”といつたものを伝えようと思い、書きました。元々は細かい設定も作った長編を書くつもりだったのですが、僕は長編を書こうと思うと失敗するので、ここではあえて作った設定を無視して書きました！自分でも凄くうまくいった作品とは思っていないので特に宣伝するつもりはありませんが、何か御意見をいただけたら、とても嬉しいです！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8003h/>

---

精霊とぼく

2010年10月15日23時03分発行